

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02189

研究課題名(和文) 舞台芸術の近代化における協働製作を背景とした上演の新奇性とポピュラリティの研究

研究課題名(英文) Study of Innovativeness and popularization brought about by collaborative works in the modernization of performing arts

研究代表者

大林 のり子 (OBAYASHI, NORIKO)

明治大学・文学部・専任准教授

研究者番号：00335324

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の当初の目的は、1910年代～30年代のヨーロッパ舞台芸術文化について、共同体あるいは協働という視点から演劇史的な読み直しを行うこととした。それは、現代の演劇に、ユニット性、プロデュース性、コラボレーションなどの「ゆるやかな集団」による製作形態が増加し、特定の思想、理念で結びつけられた従来の劇団性との違いが顕著になっていることに鑑みて、その萌芽の時期として舞台芸術の近代化の問題を再検討するであった。演出家マックス・ラインハルトの欧州各地に展開された共同製作の中から、これまで注目されてこなかったオペレッタの試みを調査することで、新たな見地を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to rethink European performing arts and culture in the 1910s and 1930s from the viewpoint of community or collaboration in the theatre. In today theatrical production, forms of production by "fragile team" such as small unit, producer system and collaborative production are increasing. It is different from the traditional theater grouping tied with specific thought and philosophy. In this research I tried to reexamine the questions of the modernization of the performing art as sprouting season.

研究分野：演劇学・演劇史

キーワード：舞台芸術 ポピュラリティ 新奇性 協働製作 コラボレーション マックス・ラインハルト

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 現代の演劇は、ユニット性、プロデューサー制、コラボレーションなどの「ゆるやかな集団」による製作形態が増加し、特定の思想、理念で結びつけられた従来の劇団性との違いが顕著になっている。そこにはモダンとポストモダン、あるいはドラマとポストドラマといった枠組みで語られている現状があるが、その萌芽ともいえる 20 世紀前半の演劇史において、その継続性を捉える指針は、前衛性や新奇性という側面からのみ語られてきた経緯がある。

(2) オーストリア＝ドイツの演出家マックス・ラインハルトの仕事の歴史的重要性は、「実験演劇」「アヴァンギャルド演劇」の萌芽の時期において、実験的側面では、「劇場空間の改革」「祝祭としての演劇の再生」「表現主義戯曲、演劇の展開への影響」といった点ですでに認知されている。しかし一方で、ラインハルトの演出が得た「ポピュラリティ」については、研究者は実験的姿勢の甘さを指摘するに止まり、それを近現代演劇の新たな展開として位置づけるには至っていないように思われる。

「ポピュラリティ」＝「商業主義」は、資本主義批判を基盤として展開されてきた近代演劇史の文脈においては、破壊すべき大衆趣味または無自覚に形成される大衆的思想体系を形成する事に他ならず、その「ポピュラリティ」は「実験演劇」とは相反する要素として記述されてきた。

一方、近年の 20～30 年の演劇研究においては、従来の演劇史観では語られなかった大衆演劇への研究も増え、益々関心が高まっているように思われる。その傾向は、もちろんラインハルトを始めとする「アヴァンギャルド演劇」の旗手の活動に端を発し、サーカスや道化芸、古い民衆演劇から近現代の観客に訴えかける演劇の源泉を見いだそうとする演劇の改革運動の一連の活動があったことは言うまでもないが、むしろこうした研究潮流は、「改革」を記述する従来の演劇史の行き詰まりを打開するための一連の演劇史読み替えの試みとして見るべきだろう。

本研究においては、演出家マックス・ラインハルトの特異性、つまり「実験演劇」として定着している評価と、それにもまして合わせ持つ「ポピュラリティ」という両面性に着目し、ラインハルト演出の「ポピュラリティ」の現代性を明らかにしていくことで、近現代の演劇史および演劇研究の流れの中に新たな形で位置づけたいと考える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、1910 年代～30 年代のヨーロッパ舞台芸術文化について、共同体あるいは協働という視点から演劇史的な読み直しを行うことであった。特に従来の演劇史が扱ってきた先鋭的で実験的な舞台芸術という側面に加えて、当時の演劇製作におけ

る協働性という問題を捉え治すことによって、より商業的な成功に至る演劇のポピュラリティを分析対象にすることが可能になると考えた。

(2) 「ポピュラリティ」の問題を読み解く上で、協働製作という点に注目することで、以下の点を明らかにする可能性がある。

総合性やシアトリカルティの分析  
ラインハルト演出には、劇作家や音楽家、舞台美術家との対等な協働により「総合芸術」としてのみ可能な舞台表現を意図した舞台製作の試みが複数見られる。近代以後の舞台における表現は、各分野のプロフェッショナルが技術力や知恵を結集する必要性がより高くなり、分業制がますます進む。伝統的なヨーロッパの劇場組織では、演出家を頂点としたピラミッド型の分業制が定着し、組織的に働く形が定着している。しかしながら、ラインハルトの実践は、そうした固定化したプロ集団のあり方とは異なるアーティスティックな協働性によっていたことが明らかである。

### 受容の仕組み

上演の「ポピュラリティ」を獲得する要因は、現代においてはマスメディアに露出する俳優や演出家、その宣伝効果による所が大きい。観客を惹きつける仕組みは、ここ 100 年で大きく様変わりしているが、その方法の萌芽は 20 世紀初頭にすでに見いだすことができる。演出家を紹介する書籍や図版の出版などがその例であろう。しかしその背景には、芸術を趣向する一定の観客層の存在があり、それは芸術的文化的価値基準を保守する仕組みでもあった。ラインハルトの活動に目を向けると、彼が協働した芸術家の多様性と、それぞれの時期に新たな関係を繋いでいく柔軟な姿勢が見受けられる。この「ゆるやかな集団性」が彼の上演に新奇性をもたらしたことは間違いない。いわば芸術家コミュニティにおいて形成される価値基準を保持しながらも、一方で「ポピュラリティ」を獲得する原動力になったと考えられる。

## 3. 研究の方法

(1) 主としてドイツ語圏と欧米各国で、前衛性に加えポピュラリティを獲得し得た演出家マックス・ラインハルトを取り巻く、各地での多彩な協働製作の様相に焦点を当てながら、重要と思われる協働者を選定し、また彼らが関わった舞台製作の状況や変遷について追跡することとした。

(2) 具体的には、舞台美術家・音楽家・興行主・劇作家・舞踊家を含む舞台製作の中で、その人的な交流および演目の傾向ごとに見られる人材配置の状況を確認しながら、本研究にとって適した舞台製作の時期や内容について精査していくこととした。

(3) これまでの研究・分析をベースとしながら、ラインハルトの活動において「ポピュラリティ」と「協働製作」という視点から重

要度の高い上演の見極めとその資料収集を進めた。上演とその周辺に関する分析。ラインハルトの演出活動はドイツ語圏のみならず非ドイツ語圏（イギリスやアメリカ）へと展開する。各地における協働製作の内容について、その強弱の度合いを明らかにする。

彼の演出の「ポピュラリティ」が発揮されたのはむしろ非ドイツ語圏における活動に顕著であるように見えるが、その背景には現地のスタッフとの密接な協働製作の態度が見いだされる。一方で、1910～20年代のベルリンを拠点とした活動は、戦時下という特殊な状況にあって、国内の様々な階層を取り込もうとする民衆劇場の構想として、非ドイツ語圏とは異なる形での「ポピュラリティ」の模索を見ることもできる。さらに異なる国における上演について、その協働製作の内容の違い、そして「ポピュラリティ」の質の違いについても明らかにする。

#### 4. 研究成果

(1) ラインハルトとの協働において、すでに注目してきた舞台美術家エルンスト・シュテルンに関する調査を、ドイツ国内にて実施したことにより、これまで明らかにならなかった点についても情報を集めることができた。先行研究として Lothar Georgi (1971) の博士論文 “Die Bühnenbildener Ernst Stern” を元に、各資料の所在が明らかになり、ラインハルトとの協働期間の前後も含めた生涯の仕事に関する資料を広く見出すことに繋がった。その結果として、これまで前衛的な舞台美術の一旦を担っていたと考えられたシュテルンの別の側面として、戯画的な遊びに満ちた作風がむしろオペレッタやレビューなど、娯楽性を含む舞台との親和性を示していたことが明らかになった。

(2) 美術家シュテルンの活動を追い、さらに、彼の美術をいち早く評価したイギリスの興行師 Charles Cochran のイギリスにおけるラインハルト舞台の紹介者としての役割にも注目した。すでに調査済みであった英米圏でのラインハルトの協働製作の1つである無言劇「奇蹟」のロンドンでの活動を支えた人物であることと、その実情について、コクランの残したエッセイを参照することにより、イギリスにおける商業性の強い劇場運営においてラインハルトの新奇性がどのように紹介され移入されていったのかといった点を追跡することができた。

その中で新たに注目される活動として、ラインハルトとコクランの 1930 年代前半に展開されたオペレッタ「美しきエレヌ」の製作の経緯やそこに関わった協働製作者に関する資料が重要であることも分かってきた。

たとえばオペレッタの関係を軸として、ラインハルトの活動を再検討したことで、実は、従来取り上げられてきた実験性や新奇性が注目された演目の背後に、経営的な理由も関係して、商業性やポピュラリティに根ざした

演目も並置されて製作されており、さらにそれらには、新奇性の強い演目で協働していた冒険心に満ちた協働製作者が、同様に名を連ねている。たとえば興味深い人物として、音楽家ではエーリッヒ・ヴォルフガング・コルンゴルトが 1920 年代後半から、ラインハルトのオペレッタ上演における編曲および作曲を担当し、その協働を介して、さらに彼らの活動は 1930 年代に亡命先のアメリカ・ハリウッドへと継続されていく。特にコルンゴルトは、ハリウッド映画の初期に映画音楽のベースを打ち立てた人物として知られている。オペラや演劇において、従来の文脈では触れられにくい領域での音楽家の活動が、実は、新奇性とポピュラリティの境界に位置する重要なものであると考え、彼らの関わった協働についても調査を進めることとした。

(4) ラインハルトの音楽劇という側面から、あらためて彼の上演史を振り返ると、従来から知られていたホーフマンスタールとリヒャルト・シュトラウスとの協働によるオペラ「バラの騎士」「ナクソス島のアリアドネ」に劣らず、オペレッタにおける協働製作が、ラインハルトの活動の特に国際化していく中では重要であることが、さらなる調査を通してはっきりと見えてきた。国際的な場で評価を得たとされている悲劇「オイディプス」の欧州各地巡演公演や、その大劇場演出の英米圏での展開のひとつである無言劇「奇蹟」の成功に加えて、オペレッタを介した国際的な活動の広がりや、興味深い事例を提示している。調査を進めてみると、ラインハルトが当初はベルリンの自身の劇団で製作した舞台を、主たる俳優と共に巡演公演として欧州内を巡ったのに対して、1910 年代のオペレッタ演出の頃から、現代でいうプロデュース公演に近い形での舞台製作の実践が行われるようになっていく。「演出」というパッケージを、各地の現地のスタッフや俳優と新たに製作するという試みも始まり、協働製作の面での国際化も進むことになる。

その背景には、第一次大戦を前後した国際情勢とユダヤ系という出自から、ドイツ語圏での活動が徐々に難しくなったという事情も推し量られるが、結果として、言語を越えた表現への可能性を模索し、また、異文化圏にも理解可能な演出手法を獲得していくことに繋がったといえる。

国際的な協働製作においては、言語よりも音楽や舞踊や身振りなどが発揮される音楽劇が、浸透性が高いものとして採用され、かつラインハルトの新奇性をも伝達しうる素材として、オペレッタ製作が行われたと考えられる。

(5) 言語の異なる国を跨いで、同タイトルのオペレッタが数年の間に複数製作されている状況なども明らかになってきたが、ここでは各地で協働した人材が、複雑に交錯しながら、各地の観客や空間に合わせた修正や変更を加えていく過程なども見て取れるが、そ

れは現代のミュージカル製作において、一般的に行われている手法が、すでにラインハルトの国際化する協働製作において、その萌芽を見せていることを示している。

このような調査研究を通して、本研究の当初の目的は、一点に成果を得ることができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

大林のり子「マックス・ラインハルトのオペレッタ演出ー新たな祝祭劇への接点(1)」  
近現代演劇研究 第7号、査読有、2018、13-31

〔学会発表〕(計1件)

「マックス・ラインハルトのオペレッタ演出ー新たな祝祭劇との接点」西洋比較演劇研究会、2017年5月20日、於・明治大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

大林 のり子 (OBAYASHI, Noriko)

明治大学文学部・准教授

研究者番号：00335324